学生まち活一八戸アートと地域活性化の研究

平成 24 年 3 月 八戸市都市研究検討会

学生まち活―八戸アートと地域活性化の研究プロジェクトチーム

目 次

はじめに	一研	究	の背	 景	ا ا ک ا	課	題	の	限	定	•	•	•	•	•	•	•	1
第1章	学生	ま	ち泪	言の	事	例	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	2
第 2 章	学生	ま	ち泪	<u>-</u> -	-八	戸	ア		 	と	地	域	活	性	化	•	•	7
第3章	成果	: と	課題	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	19
おわりに	• •	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	22
作業日程	• 名	簿		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	23

学生まち活―八戸アートと地域活性化の研究 学生まち活―八戸アートと地域活性化の研究プロジェクトチーム

はじめに―研究の背景と課題の限定

本報告は、第2回都市研究検討会(以下、検討会)により提起された「学生まち活一八戸アートと地域活性化の研究」に関する最終報告である。

高等教育機関の地域社会への貢献が強く求められる中、研究者の専門性をもって地域の産業や経済の発展に貢献するのみならず、学生の若い活力や創造的なボランティア活動が、地方都市の活性化の力となることが期待されている。八戸市内の大学・高専の学生たちが個々の興味・関心・個性や能力を活かしながら、まちなかで多様な文化活動を実践し、あるいは地域活動に参加することを通して、地域文化の活性化に貢献し、八戸地域の文化的求心力を高めることを、ここで「学生まち活」と呼ぶことにする。

平成 23 年 2 月に開館した八戸ポータルミュージアム (はっち) の事業方針にもみられるように、現在八戸市ではアート (文化芸術活動) を活用したまちづくりが一つのテーマになっている。地域の資源を再発見し、参加のプロセスを大事にしながら新しい価値を創造しようとするコミュニティ・アートは学生まち活のコンセプトと相通じ、活動のヒントを与えてくれることも多い。そうしたコミュニティ・アート活動や、大学等が展開する「サイエンス・カフェ」などの教養 (リベラル・アーツ) 活動、ものづくりや地場産業、伝統芸能を含む、広く八戸の独自な創造力・求心力となり得る文化的資源の掘り起しを「八戸アート」と呼びたい。

本プロジェクトは「学生まち活」-「八戸アート」の継続的な仕組みづくりのために、その方法及び成果について研究するものである。

また今回のプロジェクトにおいては、東日本大震災の発生により、震災対応における学生の活動も取り上げることとする。足元から広く延びる被災地の復興は八戸地域の活性化の延長上にあるものと考えられ、またそこには学生が活かされる状況があるからである。

第1章 学生まち活の事例

1 全国の事例

(1) たかさき活性剤本舗

1)契機

高崎市の中心市街地の活力低下とそれを克服し、再生するため 1999 年度に「中心市街地活性化計画」を策定することになり、活性化に関する調査を高崎経済大学に依頼した。大学は「高崎経済大学基本計画策定プロジェクトチーム」を設置し、学生の参画する調査研究を行うこととなった。地域政策学部の学生 20 人が組織された。現地調査の拠点として、高崎駅近くの空き店舗が 1999 年 6 月にオープンした。

2) 形態

前述のように、活動場所は高崎市の中心商店街の二階建てビルの一階である。 広さは約12畳、設備は電話とファクシミリ1台、パソコン1台、テーブル、 椅子などである。スタッフは前述の学部のゼミ生であり、全員がボランティア として活動した。学生は交代で本部に常駐し、役割分担をしながら活動した。 活動日は、1999年度は週4日、2000年度は毎週木・金曜日と第二・第四日曜 日、2001年度以降は、週3日(水・木・金曜日)であった。

3)内容

1999年度は前述の「基本計画」の基礎資料づくりのための市民アンケートやヒアリング調査であった。2000年度は、「高崎見聞録」と題するまち歩きのイベントの開催、学生討論会の実施、市街地活性フォーラムの開催、地域イベントへの参加などであった。2001年度は、本舗のギャラリー化、ダルカン(達磨と観音に関連した地域活性化の取り組み)、「中山道絵巻」の作成、シンポジュウムの開催、クリーン作戦などであった。2002年度は、前述の事業の継続、マップづくり、休憩スペースの設置、広報誌づくりなどであった。2003年度は、前年度事業の継続が行われた。

4)活動資金

2000 年度以降、本舗運営に当たって、毎年、県と市の折半で年間約 200 万円の支援があった。県の支援は 2003 年度で終了した。

(2) やまぐち文化発信ショップ

1)契機

山口県文化振興課は 1998 年度の地域の重要課題として、第一に、地域に開かれた(県立)大学と産学官連携の具体化、第二に、中心市街地の活性化、第三に文化によるまちづくり、の三つを検討していた。これら三課題を融合した

事業として、「やまぐち文化発信ショップ」が生まれた。すなわち、産学官連携によって中心商店街の空き店舗に山口県立大学大学院のサテライト研究室を設置し、ここを拠点として、山口の歴史文化資源をテーマにしたデザイン研究等行い、学生の感性により創造的作品を製作し、展示・販売やイベント・交流などを行う。この事業により、大学の情報発信、地域の歴史文化発信力の向上、地域の創造的活力を生み出そうとしたのである。

2) 形態

1999年4月、山口県により「やまぐち文化発信ショップ運営委員会」が設置され、事務局は山口商工会議所がつとめた。「運営委員会」は大学院生によるショップ経営の立ち上げを支援するという位置づけの下、三年間の期間限定事業とした。ショップは、山口市の中心市街地の空き店舗を利用した。

3)内容

活動内容は、山口ゆかりのテーマをモチーフとした各種作品の開発・制作・ 販売、商店街でのファッションショー、企業との交流、キャラクターづくりと 製品販売、スペインの視察研修、スペイン企業との交流などであった。

これらの活動を通して、全国規模のファッションショーの開催、やまぐち街なか大学(大学教員がまちなかに出向いて市民講座を開く事業)の開催、市街地活性化における大学との連携の手がかりが得られたこと、などの成果が生まれた。

4)活動資金

毎年の事業費は家賃・光熱費、材料費、ファッションショー開催費、交流事業費など、約 1000 万円であった。負担は県・市・民間事業者(中国電力、コクヨなど)がそれぞれ 3 分の 1 であった。

(3)かしも木匠塾

1)契機

建築学において木造建築の学習・伝承が消えつつあることに危惧を抱いた大学教員グループが、1991年に森と木を通じて建築と住環境を考える「建築フォーラム」を発足させた。このフォーラムに集まった大学三校が学生を伴って合同セミナーを開催した。ここから「学生が森と木と木造建築を学ぶ体験学習の場」として「木匠塾」が始まった。1994年岐阜県加子母村の村長が活動フィールドを提供することとなり、「かしも木匠塾実行委員会」が発足し、受け入れ体制を整え、「かしも木匠塾」が誕生した。

2) 形態

6校のレギュラー大学を中心に、毎年8月のお盆明け約2週間にわたって、

加子母村において作品製作を行い、交流を繰り広げる。主催・運営は「かしも 木匠塾実行委員会」が行い、学生が持ち回りでまとめ役として幹事をつとめる。

3) 内容

学生は製作に先立って、5 月頃から施主との打ち合わせ、設計、建築業者からのアドバイス、材料調達、基礎工事などのため、3~4 回村を訪れる。8 月の盆明けにいっせいに各大学の学生が村を訪れる。初日に開校式を行い、2 週間滞在して作品を仕上げる。期間中、村民との交流会も行われる。最終日には各大学の実習成果の発表と閉校式が行われる。なお各大学では単位取得を伴う実習として位置づけている。作品としては、保育園児のためのバス停、藤棚、遊具、川床付き東屋、ぶどう棚などである。

4)活動資金

加子母村では毎年、事業費として約 100 万円を計上している。内訳は各大学への材料費補助 60 万円、開校式・閉校式、村民との交流会経費 20 万円、事務局諸経費 20 万円である。交通費・宿泊費・食事代等は学生の自己負担である。また材料費の超過分は施主と大学が負担することとなっている。(以上の叙述は、友成[2004]を参考にしている)

(4) 岐阜経済大学マイスター俱楽部

1)契機

1998年10月、岐阜経済大学、大垣駅前商店街振興組合、大垣地域産業情報研究協議会の三者が連携して、JR大垣駅玄関口にある共同ビル1階に「まちなか研究室」が開設されたことを出自とする。その主旨は、学生たちが中心市街地を舞台に自主運営を原則として活動するための施設である。

2) 形態

はじめは、大垣商工会議所が店舗賃貸料や光熱費などを負担し、岐阜経済大学鈴木ゼミナールの学生が活動し、商店街がその活動を支援するという「空き店舗対策モデル事業」として出発した。倶楽部誕生後、「まちづくり工房大垣」や「大垣まちづくり市民活動支援センター」などが多くの学生参加によって結成され、協働によるまちづくり活動を進めていった。

3)内容

設立当初の活動は、調査研究活動であり、商店街の事業者へのヒアリングや業種調査などであった。さらに駅前商店街にある飲食店を取材し、個性豊かな情報を収集し、主婦・高齢者・若者の目線で紹介する「大垣駅雨商店街・夢マップ」を制作し、市民に配布した。また商店街で学生証を提示すれば購入する商品を値引きする「学割の店」事業に取り組んだ。マイスター倶楽部事業化第1号で

ある。

その後、大垣市の中心市街地活性基本計画策定などに伴って設立された「まちづくり工房大垣」のメンバーとして 25 名の学生が参加し、「情報発信」「バリアフリー」「空き店舗活用」「住環境保全」「商店街活性化」「歴史観光」の 6 つのテーマからなる市民グループをつくり、中心市街地の再構築事業に参画していく。学生たちは、市街地の空洞化要因調査、商店街との協働での集客イベントの企画、大垣の歴史や文化資源の掘り起こしと活用方法の検討などを行った。「情報発信グループ」では、学生が編集長を担当し、「まちづくり工房大垣ニュース」を原則毎月発行し、約 2000 部を商店街等に配付した。「バリアフリーグループ」は、障害者団体やボランティア団体とともに、市民を巻き込んだ商店街バリアフリー調査や障害者・高齢者の介助を進んで行える「お助けパーソンの店」の認定と紹介に取り組んだ。これらの活動をより一層押し進めたのが、「大垣まちづくり市民活動支援センター」立ち上げへの参加であった。

「大垣まちづくり市民活動支援センター」立ち上げへの関与は、2000 年 8 月から始まった「まちづくり市民活動支援研究会」への学生の参加を契機とする。そこでは、全国の市民活動支援センターの理念や市民活動支援の内容を調査する、当事者を招いて講演会を開催する、支援センター設立の可能性を探る、などの活動が行われた。以上の研究成果を踏まえ、2001 年「大垣まちづくり市民活動支援センター運営会議」を設置し、実証実験を行った。マイスター倶楽部の学生は、センターの運営場所の設計と支援メニューづくりに参加した。実証実験の期間中、学生は市民活動支援のための講演会・シンポジュウム・イベントなどの企画に参加し、市民や行政職員とともにセンターの運営を行った。

この経験を踏まえ、大垣市は「大垣市まちづくり市民活動育成支援条例素案」 策定に着手し、学生も策定実行委員会に参加することとなった。2002年「大垣 市まちづくり市民活動育成支援検討委員会」が設けられた。委員会では前述の 「素案」を市民参加で議論するワークショップを開催し、学生も参加した。「素案」 は検討委員会によってまとめられ、議会で審議され、「大垣市まちづくり市民活 動育成支援条例」が 2003年4月に公布施行された。参加した学生は、行政で は困難な公共サービスを提供したり、行政と協働して公共サービスを生み出す 市民活動を支援していくためのシステムについてアイディアを出す経験をつむ ことができた。さらにこの条例に基づき、市民活動支援センターである「大垣す まいるセンター」が発足し、マイスター倶楽部の学生が理事に就任した。こうし て、学生は、大学と地域の協働の現場に「ゲスト」として参加する立場から、「主 人公」や「縁の下の力持ち」として参加する立場へと変貌を遂げることとなった。 以上のようなマイスター倶楽部の活動は5つの段階を経ながら進められてき たといわれる。第一段階は、調査活動を通して市街地や都市の課題や要因を分析することである。第二段階は、まちづくり活動の意義や目標を立てることである。第三段階は、まちづくり活動計画を立て実践することである。第四段階は、活動資金の調達を図ることである。第五段階は、まちづくりの「マネジメントカ」を養うことである。

マイスター倶楽部の経験は、「大学と地域の協働条件」を次のようなものとして定式化することができた。第一に、学生にための能動的なフィールド学習の仕組みや活動拠点を整えていくことである。第二に、学生たちの好奇心を引き出し、「はじめの一歩」へと導く仕掛けづくりが重要である。第三に、大学教員自身が学生とともに地域を歩き、課題を見出し、課題解決を通して地域社会で何を実現するのかその方法はどうあるべきなのかを関係者と協議し、計画し、行動していくことである。第四に、学生たちの間違いや失敗を可能な限り許容することが重要である。

4)活動資金

岐阜経済大学ではマイスター倶楽部の施設管理費用を大垣商工会議所や大垣市TMOと共同で負担(総額380万円で半分が大学負担)し、2003年7月からは同倶楽部を地域連携推進センターの付置機関を位置づけた。(以上の叙述は、鈴木[2004]を参考にしている)

<引用·参考文献>

友成真一『「現場」でつながる地域と大学』東洋経済新報社、2004年 鈴木誠『大学と地域のまちづくり宣言 岐阜経済大学マイスター倶楽部の挑戦』 自治体研究社、2004年

この他、三浦展+神奈川大学曽我部昌史研究室『商店街再生計画』洋泉社、2008 年、の「まちづくり」コラボ事例集、が参考になる。

第2章 八戸地域における学生まち活―八戸アートと地域活性化

1 八戸地域における学生まち活のベース

八戸市内の大学・高専は郊外に立地するため、中心街で自主的かつ継続的に活動するには不利な面がある。しかし組織的に独自の活動を続けているグループはあり、またこれまで3学の教員と学生が協働でまちづくりに取り組んできたベースとしてのいくつかの活動があった。これらは八戸市での学生まち活を考える上できわめて重要な場であったと考えられるため、ここで紹介しておきたい。

(1) 市民ワークショップへの学生の参加

八戸市では、中心市街地の賑わいの減少という課題に対して市民参加型で検討するため、都市政策課が「都心地区再生市民ワークショップ」を平成 16~19 年度の 4 年間開催してきた。毎年一般公募による市民 30~50 名により年間数回のワークショップで、グループごとのテーマに沿った検討を重ねた。グループテーマは、旧市民病院跡地や本八戸駅通りなど特定の地区についての活用や活性化について考えるもの、中心市街の道路交通、まちなか居住促進、まちづくり条例制定についての検討など、当初は行政施策上の課題について話し合いアイディアを提案するものから、しだいにそのなかで市民自ら実践できる取り組みへとシフトしていった。

平成 20 年度はそれまでのワークショップでの検討を踏まえ、より発展的な取り組みとするため、平成 19 年度都心地区再生市民ワークショップメンバーを中心とした市民による自主的まちづくりグループ「まちなかミュージアムワークショップ(MMWS)」を主体に実践的活動を始め、行政側は新設された中心市街地活性化推進室に引き継がれて MMWS をサポートし、同年度中に一回シンポジウムを開催するという形式をとった。

平成 21~23 年度は MMWS の活動はそのままに、再び市主催(まちづくり文化推進室)で「中心市街地活性化市民ワークショップ」が開催された。以前と参加者の中心的メンバーおよびアドバイザー(弘前大学教育学部・北原啓司教授)は変わらず、話し合いよりまち育て活動実践のワーキンググループ的な指向の強い内容になった。以下では都心地区再生市民ワークショップと中心市街地活性化市民ワークショップをまとめて便宜的に「市民WS」と呼ぶ。

市民WSには一般市民の方々とともにこれまでも市内の大学・高専の学生および教員が参加し、さまざまな活動にとりくんできた。後述する本八戸駅通りのイルミネーションプロジェクトは市民WSのなかで平成 17 年度に学生が提案し、18 年度から実行され、その後自主的な活動として小規模ながらすでに6

シーズン続いている。また「まちなかキャンパス」も市民WSの活動のなかで 平成 $21\sim22$ 年度実施されてきた活動であり、高専、工大、八大に加え弘前大 の学生が参加している。これ以外にもこれまで市内の大学の学生や教員が市民 WSに参加してそれぞれさまざまな活動を展開してきた。

(2) アートを活用したまち育て

八戸市では、平成 20 年 7 月に八戸市中心市街地活性化基本計画が内閣府の認定を受け、その事業の一つとして中心市街地に「八戸ポータルミュージアム (はっち」」が建設されることになった。

この準備期間に市民主体のソフト事業のしくみづくりを目的としたワーキンググループ (hpm 市民ワーキング) が組織されたが、集まったメンバー中にはMMWS メンバーまたは市民ワークショップ参加者の大学・高専教員がそのまま含まれた。この施設の活用事業計画のなかには文化芸術活動振興事業が位置づけられ、設計計画には当初からアーティスト・レジデンスの機能が組み込まれており、プレ事業として平成 20 年度から積極的に現代アートを活用したまちなか活性化のプロジェクトの展開が試みられてきた。アートをテーマにしたまちづくり/地域おこしの企画は最近各地で活発に展開されている。企業メセナの第一人者であり、現在はっちアドバイザリーボード委員長でもある加藤種男氏(アサヒビール芸術文化財団事務局長、横浜市芸術文化振興財団専務理事)は、文化による都市再生のためには市民の主体的参加のシステムを作る仕掛け人(専門家)とアーティストの発想力が必要であるという。市民ワーキングのメンバーらはこうした企画のサポーターとなり参加者となっていたが、市民WS等でまちなかでの活動に活性化していた学生たちが、誰よりこれらの企画に敏感に反応し楽しんでいた様子であった。

2 平成23年度の八戸地域における学生まち活:地域連携の実践

(1) 八戸工業大学学生によるまちなかアート

1) 三春屋南口路上・ブロック塀 (パティオ 13) ペイントプロジェクト このプロジェクトは、三春屋南口路上 (パティオ 13) に縦 8.5m、横 30m の巨大デザイン画を描き、ブロック塀に地域の文化を表現する絵を描くプロジェクトである。これは「㈱まちづくり八戸」のプロジェクトの一環で、アートのまち・はちのへを推進する会と八戸塗装業組合が協力・支援して実現したものである。感性デザイン学部 2 学年と 3 学年の 10 名が 6 月 13 日 (月) から 7 月 23 日 (土) の間で実施した。

デザイン画のテーマは「共生」。八戸の森を緑色で、海を青色で表現。森と海

に成長する植物のつるを重ね、人間が自然と共生することの大切さを表している。デザインは、同学部の2学年学生が手がけた。ブロック塀には、八戸を表すモチーフとして「蕪島」「えんぶり」「いちい」「ウミネコ」「アイスホッケー」などを表現した。

実施に際しては、震災のために 4 月の授業開始が遅れ、土曜にも夕方まで授業があり、日曜には資格試験などで時間が限られている中で、その合間をぬうように、天候をにらみながら実施した。

実施の過程において、多くの市民から元気付けられるとの喜びの声や賞賛の声を聞き、多くの激励を頂いた。震災後沈む思いの中、前向きに考えるきっかけにもなったとの声もあった。学生たちは、当初想像していた以上の市民の声に驚き、活動の社会に対する影響の大きさを感じ、社会の一員としての自覚を促すことのできた有意義な活動となった。

この活動の成果として「市民とのコミュニケーションができたこと」、「市民の活力回復、生活意欲促進、夢と希望の灯火に結びついたこと」「学生自らの社会人基礎力の一部を養成できたこと」「学生の街への関心が高まったこと」などである。





◆子供たちも参加



◆賑い創出



◆市民と対話しながらの作業

(2) ADL (八戸工業大学建築デザイン研究会)の活動 - 「防災デザインスクール」

東日本大震災が発生し、これまでの防災に対する意識、対策、体制では補いきれないことが分かった。これを機会に、忘れられていた過去の教訓や自主防災を見直し、コミュニティの核となる学校を中心に事業を行うことを目的として八戸工業大学建築デザイン研究会(ADL)では、大学で学んだ専門知識を活かし、災害に強いまちづくりの活動を実践している。

現在、過去の災害対策や今回の震災の被害状況、災害の備えについて調査や 資料収集を実施しており、それらにより学校施設を地域の防災拠点とした独自 のまちづくり案を設計し、小学生にも分かりやすい災害対策絵本の制作に取り 組んでいる。活動の一環として、八戸市立小中野小学校において「防災デザイ ンスクール」通学路安全教室を実施した。

八戸市立小中野小学校 5 年生を対象に、通学路安全教育として、東日本大震災の特徴、八戸市の津波被害状況、震災絵本の発表を行い、児童の意見や感想を聴いた。さらに、通学路安全点検の準備を行い、点検の目的、注意事項、班編成、点検ルートの確認、カメラの使用法の確認を行った上で、通学路安全点検として、小中野小学校 5 年生や保護者と一緒に小中野 7、8 丁目の新井田川河口を、3 つのグループ 18 班、に分かれて点検した。

安全点検の目的は、1)安全に避難できる建物を探す、2)地震や津波で危険な場所を発見する、3)安全点検マップを作りみんなに教えることである。この他にも、安全点検中に出会った住民の方に東日本大震災に関するインタビュー調査を行った。児童に東日本大震災の特徴や八戸市の津波の被害を理解してもらうことで、防災に対する興味・関心を持ってもらい、自主防災意識を高めることができると考えている。また、震災絵本の発表を行い、児童の意見・感想を新たに盛り込むことで、子ども用自主防災マニュアルとしての完成度が上がり、一般の児童にも理解しやすくなると考える。

これらの調査により、小中野小学校学区内の震災時に安全に避難できる場所、 地震や津波が発生した場合に危険な場所を把握し、自主防災の意識が高められ たと思われる。また、住民の方へのインタビュー調査により、実際の体験談を 聞くことで震災の怖さを改めて理解でき、今後の教訓として活かしていければ と考えている。



◆写真1 安全点検風景1



◆写真 2 安全点検風景 2



◆写真 3 安全点検風景 3



◆写真 4 安全点検風景 4



◆写真 5 安全マップ作成 1



◆写真 6 安全マップ作成 2



◆写真7 安全マップ発表会1

11



◆写真 8 安全マップ発表会 2

(3) まちなかキャンパス(2011年3月7日 於:はっち広場)

このイベントは、平成 22 年度市民ワークショップから生まれた、「まちなかキャンパス実行委員会」が主催したものである。「まちなかキャンパス」とは、 八戸市に関わる様々な学生・市民の発表の場であり、高校生と大学生が交流する場でもある。発表者及びテーマは以下の通りであった。

成田梨菜(弘前大学教育学部地域生活学科4年)

「市民活動における創発的まち育てに関する研究」

白山一樹 (八戸工業高等専門学校電気情報工学科5年)

「WebGIS と携帯電話を用いたまちマップ作成システム」

八戸東高校英語部 リンジー・ニコルソンと英語部員

Let's play in English

坂野仁志 (八戸大学ビジネス学部2年)

「八戸大生の"カタリバ"活動について」

若宮祐希・椛本拓麿(八戸工業大学感性デザイン学部感性デザイン学科3年)「コンペでのものづくりの実践」

(4) 八戸高専・文化生活研究会「本八通り 光のプロジェクト 2011-2012」

市民WSでの活動から始まり、本八戸駅通りで平成 18 年から毎冬 12 月~1 月にかけて自転車のホイールを使ったイルミネーションのプロジェクトを実施してきた。小規模ながらクリスマス風の派手なイルミネーションとは一線を画した趣向で人目に留まり、設置させていただく地元の方々からも受け入れられ、期待されるようになってきた。しかし一方で、活動がマンネリ化して活動する学生のモティベーションが低下してきた。そこで今年度は八戸市学生地域貢献表彰制度助成金を受けてインスタレーションアーティストの指導の下、例年とは違う新たな試みでのアートプロジェクトとしてライトアッププロジェクトに取り組んだ。指導を依頼したのは東京在住の美術家・安岐理加氏である。氏は参加型のインスタレーション作品を制作している作家で、平成 20 年 12 月 20~25 日に八戸市内で八戸ポータルミュージアム・プレ事業プロジェクト「風のひかりのみち」を実施している。

今冬の本八通りのプロジェクトは「本八 光のプロジェクト 2011-2012」と題し、折り紙の船(八戸の海を象徴)の中にLEDをホタル明滅させるモビールを作成、設置した。包装紙をサラダ油に浸して乾かし光の透過性を持たせ、それらで船を折る。その船の先を切り、LED 回路の導線を通して次の船に繋ぎー本にまとめる。一本には船が $4\sim5$ 個連なっている。派手な光の演出ではなく、ほのかなホタル明滅で、歩かなければ覗くことのできない演出となった。

これを12月1日からプロジェクトの準備等を行い、7日から9日まで、本八通りの空き店舗を利用して開かれたギャラリーで製作し、通り沿いの5店舗に設置した。設置期間は2011年の12月9日から2012年の2月中旬を目安としている。例年より光量が弱かったため残念ながら設置した店舗からの評価は例年と比べて低くなってしまったが、作品のメッセージや学生の参加のプロセスなどプロジェクトのコンセプトについては一定の評価が得られた。設置した学生は、準備や取り組みにかける時間が不足だったこと、自分たちがプロジェクトの趣旨を理解しきっていなかったことがこの評価に繋がったと考え、今後に向けての反省点を挙げた。課題は多かったがアーティストや地域住民とのコミュニケーションにチャレンジした点で「学生まち活」「八戸アート」を強く志向した活動であったといえる。



◆内丸えんぶり宿での設置作業



◆設置されたイルミネーション作品

(5)体験発表「八戸(の若者たち)は、東日本大震災とどう向き合ってきたか」

平成23年9月24日(土)に八戸ポータルミュージアム(はっち)において開催された、八戸青年会議所主催「ラブはちミュージアム〜絆〜」と題するイベントの一環として行われた。今回の大震災の復旧・復興活動における八戸大学・八戸短期大学・八戸工業大学・八戸工業高等専門学校のボランティア活動や被災地支援活動について、各校の学生が、どのような活動を行い、何を感じまた考えたかを、発表した。概要は以下の通りである。

1) 八戸大学人間健康学部 国分夏子さん 東日本大震災を通して、感じたことや活動について報告したい。

私は東日本大震災が起きた 3月11日は、実家のある福島県本宮市にいた。本宮市は、人口 3万1千人の県内で一番小さな市で、福島市と郡山市の中間地点にある。本宮市では2日間の停電があった。震災では、実家の家屋の一部が損壊した。今でも、野生きのこ・たけのこ・原木しいたけが出荷停止となって

いる。

福島県は東日本大震災の自然災害に加え、東京電力福島第1原発事故に見舞 われた。放射能などの風評被害で不安な気持ちである。

東日本大震災で私が感じたことは、テレビなどの映像を通して被害の大きさを改めて知り、たくさんの人が津波で亡くなったことにこれまで体験したこのない深い悲しみだった。

東日本大震災被災地での私の活動としては今年度最初のゼミナールの時間に、 震災の体験について話し合いをした。

ゼミ生それぞれが体験した震災当時の思いや 1 か月経った今の気持ちなどを 語り合った。

そして、私たちにも何か出来ることはないかと考え、ボランティア活動に参加することにした。

5月12日のゼミナールの時間に、被災地である 「岩手県野田村」 を訪問した。そのときは、支援物資の袋詰めをした。

5月14日のボランティア活動では、支援物資の仕分けをした。被災者の要望に応えられるよう2人組で協力して袋詰めをした。体育館にはたくさんの物資があり、驚いた。

6月25日の活動は外でがれきの撤去を行った。そこに家が存在していたで あろうと思えるようながれきがあり残酷な気持ちになった。

ボランティア活動を通して感じたことは、支援物資の多さから全国や世界の 人たちの協力する気持ちや、人と人との結びつきであった。

家などの衣、食、住などの全てが津波によって流され、被災者は本当に大変なのだと強く感じた。

たくさんの人がボランティア活動をしていて1人の力は小さくても、10人 集まれば大きな力になるのだと少しでも力になれた気がしてうれしかった。

今後、機会があれば、もっと津波の被害が大きかった地域に行って活動して みたい。

原発事故により福島県民だけが様々なことで困っている。早く解決してほしい。そして地元福島に貢献したい。

2) 八戸短期大学ライフデザイン学科 岩谷憲汰君及び高橋美沙樹さん 本学においても、今回の震災に際して、さまざまなボランティア活動を実施 してきたが、今日は、ライフデザイン学科で実施した、石巻市の炊き出し、野 田村の慰問、大槌町のがれき処理について報告する。短大という特性上女子が 多いため、がれき撤去などより、炊き出しや慰問などが私たちのできるボラン ティアの特徴ですが男子の多いゼミなどでは、がれき処理なども実施した。

石巻市の炊き出しについては、4月に、B-1グランプリの主催団体である愛Bリーグが、毎月最終土日に被災地の炊き出し等支援を決定した。八戸せんべい汁研究所もこの一員だが、積極的に参加することを決定し4月より実施することとなった。ライフデザイン学科では、昨年より八戸せんべい汁研究所のサポーターズスタッフとして、B-1グランプリやその他各イベントに参加しており、ボランティア活動にも是非参加したいと思いエントリーした。担当教員からは無理はするな、と言われましたが、自分たちが少しでも支援できるチャンスだと思い参加を決めた。

4月29日から5月1日の日程の中で、4月29日と30日の2日間参加した。 八戸せんべい汁研究所、八戸市役所、本学からと合わせて17名で実施したが、 秋田県横手市から横手やきそば暖簾会の皆さんも合流して被災者の皆さんには、 八戸せんべい汁と横手やきそばをセットでお渡しすることとした。このほか、 カップめんやカンヅメ、パン、水などの支援物資も一緒にとどけた。

4月29日、夕方、石巻市の北上中学校を訪問し、炊き出しを実施しました。ここは、300名の被災者が避難しているところでした。近くには報道で話題になりたくさんの児童、教員を失った大川小学校があるところである。避難所の300食と近隣の避難所200食を用意した。避難所の方々はここには炊き出しはめったに来ないと言っておられた。炊き出しではたくさんの方に感謝の言葉をいただき、逆にこちらが恐縮してしまった。避難所の隣には、仮設住宅が建設中であった。

2日目は、石巻市の牡鹿半島にある牡鹿地区(鮎川)の牡鹿公民館で 10 時からの炊き出しを実施した。こちらは、東京方面からのがれき撤去などのボランティアツアーバスが多数みられた。ここでも 500 食の炊き出しを行った。近隣の避難所の方にも分けた。炊き出し場所の牡鹿公民館は被災して天井などは剥げ落ち、ぼろぼろの建物の中で行った。ここでも感謝の言葉が多かった。

愛Bリーグの一員である石巻茶色いやきそばアカデミーの皆さんの協力・案内で炊き出しの少ない場所に行くことができた。炊き出しが来るところにはしょっちゅう来るが、来ないところにはめったに来ないそうである。そんな意味でも今回は意義があった。また、たくさんの感謝の言葉をいただき、逆にこちらが元気づけられた。

6月29日、ライフデザイン学科2年生で岩手県野田村の慰問を実施した。本学の卒業生がいる、野田村保育所と特別養護老人ホームことぶき荘を2班に分かれて慰問した。震災から約3カ月たち、被災者の心のケアが必要だということで、慰問することとし、保育所で一緒に遊んだり、お年寄りと歌ったりレク

リエーションを実施したりすることとした。午後には、野田村を花でいっぱい にしよう、の企画で陸中野田駅に花のプランターを設置した。

野田村保育所は、3月11日当日に津波の避難訓練を行ったあとに、地震が起こり、訓練通りに小さい子どもたちは泣いたりぐずることもなく避難をして、全員が無事であった。

保育所は津波で流されたので、閉園していた幼稚園の建物を借りて保育をしています。園庭でゲームや鬼ごっこをして遊んだ。

野田村の特別養護老人ホームことぶき荘を訪れ、軽い運動やレクリエーションをした。被災者の受け入れで、人数は増えているとのことであった。

午後から、被災した野田村を「花でいっぱいにしよう」と活動しているNP O活動に参加して、思い思いの花を選びプランターに花を植えた。

出来あがった花は三陸鉄道陸中野田駅に設置した。緑や花を置くだけで、明る い風景になることを実感した。

6月18日に岩手県大槌町吉里吉里にある特別養護老人ホーム三陸園付近の 瓦礫処理のボランティア活動をした。

この施設はゼミの教員の知人が経営する施設であり、何ができることがないかと施設に問い合わせてみたところ、施設に続く道路脇の瓦礫処理をしてほしいと依頼され、ゼミのメンバー、男二名、女二名、教員一名で活動した。

実際に被災地に行って思ったことは、テレビで被災地の映像を見た時はあまり現実味がなかったが、被災地に足を運んでみると想像していた以上の悲惨な 状況に衝撃を受けた。

そして、いざ瓦礫処理を行ってみると、道路脇の雑木林には材木、トタン、ガラス、網など、多くの瓦礫が担当区域一帯に散乱していた。運べる程度の大きさの瓦礫は簡単に拾うことはできたが、中には小屋の屋根部分が落ちていたり、漁に使う大きな網が木に絡まっていた。これら全てを片づけることはできなかったが、出来る範囲での仕事は行った。

瓦礫撤去の作業中、突然サイレンが鳴り、また津波が来たかと思ったが、その日が地震発生から丁度百日目で、時計は午後 2 時 46 分を指していた。この日は合同慰霊祭が行われており、津波により多くの犠牲者が出たことを改めて実感した。

また、三陸園の施設長の話では、職員の方々は出勤する際、瓦礫のある道路を通るたびに精神的な苦痛を感じているとのことだった。私達の三時間の活動ではあまり貢献できたとはいえないが、一日でも早く瓦礫が完全に撤去され、職員や町民の方々の心の負担が少しでも軽くなればいいなと思いながら帰路についた。

今回のボランティア活動を通して、被災地の現状を知ることができ、また、 三時間という短い時間ながらボランティア活動の過酷さを感じると共に、「少し は役に立てたのかな」という思いもある。また大槌町でボランティア活動をし たい。

今回の活動をとおして、報道で見る以上の悲惨な現状、避難所の様子などを知ることができた。こすぐには復興など、とてもできるものではないと実感した。同時に避難所の方々、子供や高齢者への心のケアも重要だと、実際に触れ合ってみて強く思った。また、ボランティア活動の過酷さをしり、ボランティアの方々の被災地に対する思い、やさしさを感じた。私たちは、女子が多いためなかなか力仕事は難しいかもしれないが、できることを、継続する重要さを知り、10月には再度慰問することも決定している。1日でも早く被災地の皆さんが元に戻れるよう協力していきたい。

3) 八戸工業大学 河村薫さん

河村さんは、「災害ボランティアを通じて」と題する発表を、概略以下のように行った。

ボランティア活動に参加したきっかけは、メディアで被災状況を見ることにより、「大好きな八戸を何とかしたい」という気持ちに駆られたからである。

活動内容は、第一に、床下に入ったへドロを取り出し、土嚢袋に詰める「泥出し作業」、第二に、津波で被災した家から出る災害ごみ(家具、家電など)の分別及び整理、第三に、津波で流されてきたゴミの片付け、第四に、白銀地区全体の薬まき(海水に浸かった地区をまわってへドロに薬をまく作業)、第五に、八戸市体育館に運び込まれた支援物資の分別と振り分け作業、第六に、避難所に置ける炊き出し作業、第七に、被災者の引越し支援作業、第八に、フリーマーケットの手伝い作業である。

活動を通して考えたことは、第一に、ボランティアをする側、される側でのマッチングがうまくいっていなかったため、両者に共に不満を持つ場面が見られたこと、第二に、被災者の方に了承を得ているとはいえ、他人の財産を言われるがままに捨てることに疑問もったこと、第三に、被災者の立場に立った活動することが重要であること、第四に、すべてを受入れるのではなく、断る勇気を持つことが重要であること、第五に、活動に当たって様々な思い込みをなくすことが大切であること、である。

4) 八戸工業高等専門学校 神田菜摘さん

岩手県野田村の支援活動に参加した。内容としては、支援物資の提供、現地

ボランティアセンターを通しての作業(がれきの片付け、建物の泥出し、支援 物資の仕分け等)、子どもの遊びのサポート、その他被災地のニーズに即して臨 機応変に行う活動、などである。

取り組んだ活動のなかに「足湯プロジェクト」というのがあった。たらいに お湯を張って被災者の方に足をつけてもらい、マンツーマンで手をさすったり しながらリラックスしてもらって話を聞く、という活動だ。話をしてくれたあ るおばさんは、私を気遣ってユーモアを交えながらも、話された内容はとても 重たかった。

活動するなかで、「八戸の学生」として、被災者であり、学生であるという立場は、被災者の気持ちを理解・共感しやすく、また、失われつつある世代間のコミュニケーションをとる上で重要なものであると思った。

震災から時間のたった今こそ、学生として、被災者とコミュニケーションを とっていきたい。これは被災者ばかりでなく、学生にとっても必要なことであ ると感じている。

(6) まちなかキャンパス(2012年2月25日 於:はっち広場)

市民WSの活動のなかで平成21~22年度実施されてきた活動であり、高専、 工大、八大の学生のほか、弘前大学生や八戸東高生がこれまでが参加して、ま ちづくりに関係する研究や活動の報告会を行ってきた。今年は八戸高専地域文 化研究センター主催、学生まち活協力、の体制で下記のように行われた。

日時:2012年2月25日(土) 17:15~19:00

場所:はっち広場(はっち1階)

<発表者・タイトル>

- 1 猪股 希美 (八戸工業高等専門学校環境工学科 5 年) 「本八戸駅通りの「光のプロジェクト」の評価に関する研究」
- 2 小山内 由希(弘前大学教育学部居住学研究室 4年) 「市民活動の持続性に関する研究」
- 3 李澤 雪江 (弘前大学教育学部居住学研究室 4年) 「まちなかで子どもを育てる」
- 4 川端 康正 (千葉大学工学部都市環境システム学科 4年)

「森林材および森林空間を活用した地域活力の創出―千葉県山武市における里山の再活用スタディ」

5 清水 右郷 (岩手大学工学部情報システム工学科 4 年) 「八戸検索―まちの記述と Google 検索」

第3章 成果と課題

まちづくりとは「それぞれの都市・地域住民が、まちをどのような場として構想し、その目標にしたがって、住・教育・自然・環境・福祉・労働・交通・買い物等、生活に関する全ての機能をどのように配置していくかの行為」(樋口兼次「生活圏の構築と『まちづくり』運動」『生活協同組合研究』1996年8月号、p.19)、「地域において地域社会が主体となり、行政と専門家が連携して進めるソフトハードー体となったまちの居住環境の向上をめざす活動の総体」(佐藤滋『まちづくりの科学』鹿島出版会、1999年、p.5)といわれたりする。まちづくりは「総合科学」という側面を有しているのである。

まちづくりはその活動ひとつひとつの結果が評価されるべきことは当然であるが、何らかの結果がゴールではなく、絶え間のない運動のプロセスであり、継続的かつ柔軟なプロセスそのものや、持続可能なプロセスづくりがまちづくりの本質であるといえる。

前章において示されたように、今年度の学生まち活、およびこれまでの八戸市内の学生たちの活動をふりかえってみて、学生たちのさまざまな活動が、まちづくりの視点からみて個々に一定の成果をあげつつ、継続されようとしていることが確認できたのではないかと思われる。

「学生まち活」は、学生にとって身近な地域社会の現場から考える、いわゆる PBL 実践の場であるといえる。一緒に活動する教員の目には自キャンパス内で普段見る学生の別の側面が見られる機会となり、また他機関の学生とも顔の見える関係づくりができる機会でもある。

とくに今回の「学生まち活」研究プロジェクトにおいては、普段見えにくい他機関の学生グループのまちなか活動についての情報共有ができたこと、まちなかで教育・研究活動やまちづくり活動を実践する教員同士の情報交換が進んだことも成果にあげられよう。これを契機として八戸の3校連携が、研究者同士のレベルから、地域を舞台とした学生教育および学生同士の活動レベルの連携に広がっていくことが期待される。

今後八戸での学生まち活がさらに継続、発展していくためのいくつかの課題を整理しておきたい。

●八戸における学生まち活の認識と理解:外からの視点と関わり

八戸市内の大学・高専はいずれも郊外に立地しているため、まちなか在住の 学生以外はまちなかでの活動は地域の外からの関わり、というかたちになる。 街なかに出るためにコストがかかる、学生の日常生活は概して「郊外型」であり、地域本来の顔としての中心市街地再生に関する理解や問題意識は決して高いとはいえない、といった不利な点がある。しかしながら「よそ者、若者、ばか者」の喩えの通り、地域の外からの異質な活力はまちの活性化にとっての良い刺激や力となり得る。ともすると地元の利害のみの議論に内向しかねない中心街活性化問題の視野を広げ、郊外を含めた都市全体で持続可能な地方都市の展望を考えていくことは重要である。

また、学生まち活が、真に持続可能なまちづくりのプロセスであるためには、まちにとっての活動の効果と学生にとっての教育効果双方のバランスに配慮しなければならない。学生にとってまちなかでの活動の動機が初め未熟で自己本位であったなら、活動のなかで公共性を学ばねば意味が無い。単発のイベント等への学生動員は、学生を安易に利用しているに過ぎないこともある。まちと学生それぞれの文脈でそれぞれ活かし合うプログラムを考えていく必要がある。大学等も地域もこうした問題認識を共有し、連携して学生たちのまちなかでの活動を促進させる積極的なサポートが求められる。

●活動の継続と刷新

地域との連携や地域活性化のためには、活動の継続と刷新が重要である。あるレベルの活動を継続しないと、地域との信頼関係が築けない。しかし一方では活動の継続はしばしば活動のマンネリ化に陥り、創造力とコミュニケーションを退化させてしまう。まちづくりのプロセスには、継続だけでなく、ただのくり返しに留まらない活動の積み上げと更新が求められる。

以上の問題認識から、さらに次の(1)~(4)の具体的課題を示す。

(1) 教員のまちづくりへの参加と相互連携の促進

学生は一定期間で代わっていくが、活動の継続と積み上げのためには教員の関与が欠かせない。また、まちと学生双方を活かす活動のファシリテーションの役割にしてもいちばん身近に担えるのは教員であろう。第1章でみた全国経験においても、教員の果たす役割は大きいものがある。「専門」という角度から、あるいはそれを超えた視点から積極的な関与が求められる。

「学生たちと共に地域を歩き、・・・地域社会現象の中に課題を見出し、課題の本質がどこにあるのか、課題解決を通して地域社会に何を実現するのか、そのための方法はどうあるべきかを、学生たちを巻き込んで、行政、商店街や NPO などと協働し、課題解決のための行動計画を創っていくプロセスを見せていく

こと」(鈴木[2004]、p.87) が重要である。

(2) 学生の活動拠点の確保

第二に、学生のための能動的なフィールドワーク学習の仕組みや活動拠点を整えていくことである。前者については、高等教育機関におけるカリキュラム編成のあり方に関連し、後者については、高等教育機関と行政の連携のなかで実現していく課題である。「地域全体をキャンパスに」した活動が求められ、そのためには、一定の設備を擁した定期的に集まることができる「拠点」形成が必要である。八戸市においては、前述の「はっち」がその可能性を秘めているものと思われる。

(3)活動資金の確保

平成 23 年度より、八戸市の事業として、「学生地域貢献表彰制度」が立ち上がった。市内の大学・短大・高専に籍を置く学生または学生で構成されたグループが、彼らが主体となって行う地域貢献活動企画に対して、活動資金を提供する、というものである。この制度は、学生が自ら企画した地域貢献活動を積極的に進めていく上で、きわめて意義のある制度である。継続的な事業として行える環境整備が必要である。

(4) まちなかへのアクセスの問題

八戸のまちなかでのボランタリーな学生活動を促進する上で、直接的な一番の問題は交通である。現状ではコストと利便性のみを考えると自家用車の相乗り等が実質的に有利な面があるが、交通事故のリスクや本来の持続可能な地方都市の展望を考えると、学生時代からのクルマ依存はけっして好ましいものではない。バスを軸とした公共交通体系の再構築自体が地方都市のまちづくりの大きな課題であることはいうまでもない。

試験的事業としてでもバス運賃の値下げは歓迎である。さらに若い学生ならでは、徒歩や自転車利用と連携したバス利用等、交通システムの創意工夫に前向きに取り組んでほしい、と願うばかりである。

おわりに

本報告書は、「学生まち活」を「八戸市内の大学・高専の学生たちが個々の興味・関心・個性や能力を活かしながら、まちなかで多様な文化活動を実践し、あるいは地域活動に参加することを通して、地域文化の活性化に貢献し、八戸地域の文化的求心力を高めること」と定義し、「コミュニティ・アート活動や、大学等が展開する「サイエンス・カフェ」などの教養(リベラル・アーツ)活動、ものづくりや地場産業、伝統芸能を含む、広く八戸の独自な創造力・求心力となり得る文化的資源の掘り起し」を「八戸アート」と位置づけ、継続的な仕組みづくりのための方法及び実践を通した成果について研究したものである。

第一に、「学生まち活」の全国的事例を紹介し、大半が、中心市街地活性化のための「調査活動」からスタートしていること、活動資金の裏づけがしっかりしていることなどが明らかとなった。

第二に、八戸地域における「学生まち活」のベースとして、八戸市が行ってきた「市民ワークショップ」が重要な役割を果たしたこと、「アートによるまちづくり」の拠点として「はっち」が誕生したことなどを指摘した。

第三に、「学生まち活」の実際を紹介した。そこでは「まちなかアート」の実践や、防災教育を市民と共に進めた事例、大震災を学生たちがどのように捉え、活動したかという事例発表などが紹介された。

第四に、以上の活動の成果と課題を明らかにした。

成果としては次のようなものがあげられる。

第一に、学生たちのさまざまな活動が、まちづくりの視点からみて個々に一定の成果をあげつつ、継続されようとしていることが確認できたのではないかと思われる。

第二に、普段見えにくい他機関の学生グループのまちなか活動についての情報共有ができたこと、まちなかで教育・研究活動やまちづくり活動を実践する教員同士の情報交換が進んだことも成果にあげられよう。

課題としては、八戸地域における「学生まち活」に対する視線の問題、活動の継続と刷新というものが挙げられた。より具体的には、教員のまちづくり活動への積極的関与、活動拠点の問題、活動資金の問題、まちなかへのアクセスの問題、である。

今後は、「学生まち活」の「継続と刷新」を合言葉に、教員が学生と一体となって積極的にまちづくりに関わることを通して、地域活性化を図っていくことが重要である。

八戸市都市研究検討会 学生まち活―八戸アートと地域活性化の研究プロジェクトチーム

●都市研究検討会報告

中間報告 平成 23 年 11 月 11 日 (金) 最終報告 平成 24 年 2 月 21 日 (水)

場所:八戸市役所

●作業日程

第 1 回会議 平成 22 年 11 月 18 日 (木) 第 2 回会議 平成 23 年 1 月 25 日 (火) 第 3 回会議 平成 23 年 2 月 3 日 (木) 第 4 回会議 平成 23 年 5 月 30 日 (月) 第 5 回会議 平成 23 年 9 月 9 日 (金) 第 6 回会議 平成 24 年 2 月 13 日 (月)

場所:八戸大学・八戸短期大学総合研究所市内オフィス

●名簿

八戸工業大学 感性デザイン学部

感性デザイン学科 学部長 教 授 坂本 禎智

感性デザイン学科 講師 安部 信行

八戸大学 ビジネス学部 教授 田中 哲

八戸工業高等専門学校

総合科学科長 教授 河村 信治

八戸市 まちづくり文化観光部

まちづくり文化推進室

まちづくり支援グループ 主 幹 田鎖 隆

まなかさる



発表テーマ

- 查前大学程度学品排放生民学科等 成田學業 「社会活動における創度的より育てに耐する研究」
- ハ戸主葉高等専門学校電気情報工学科5年 日山一樹 TWOGISと要用電話を用いたまちマップが成システム
- プログラー・コルソンと英語の 「Let's play in English!!」
- ハデ大学ビジネス学師2年 場所にお 「ハ戸大生のアカタリバで活動について」
- パーエ系大学系はデザイン学が続性デザイン学科3年 ア次の名。 基本系統 「コンヘアのサカバンのカッド」

まちなかキャンパス

まちなかキャンパスは、ハ戸市に関わる様々な 学生・市民の発表の場であり、なかなか交流する ことのできなかった高校・大学間を超えた交流の 場でもあります。

発表テーマは、大学での研究、高校での部活 動など。自分たちの研究や活動を市民のみなさ んへ向けて面白くお伝えします。

日時: 3月7日(月) 17:00~19:00

場所: 八戸ポータルミュージアム はっち

はっちひろば にて

*参加無料、事前申し込みは必要ありません。 どうぞお気軽にお越しください。

主催:まちなかキャンパス実行委員会

八戸市

協力:学生まち活プロジェクト

まちなかキャンパス実行委員会は、平成22年度中心市街地路性化市民 ワークショップの参加者が集まってつくった市民グループです。中心市街 地の路性化という大きな目標のために、自分たちにはいったい何ができる だろうと考え、まちなかキャンパスを企画しました。また、まちなかキャ ンパスは、八戸高等、八戸大学、八戸工業大学の三枚建携による「学生ま ち活プロジェクト」の協力を与けています。

まちなかキャンパスは、楽しみながら互いに学びあうことによる自分自 身やまちの成長を目標にしています。知らなかった大学の一直を知った り、新しいテーマに触れることのできる場として、多くの市民の方の参加 をお待ちしています。



お問い合わせ

まちなかキャンパス実行委員会

TEL: 080-6035-0714 Emell: h-machicam@live.jp

八戸市まちづくり文化修進率

TEL: 0178-43-9426

Email:

machi@chy.hachinohe.aomori.jp



八戸ポータルミュージアム「はっち」

八戸市三日町 11-1

9月24日母

大ケガから復活したハヤブサとブロレスラー矢口登場。 ミュージシャン FUMi☆田口のライブ

11:30- 絆~元気です八戸~ 合唱出演:コスモス個友愛の会





これからの八戸を考える市民フォーラム

北(八戸)からの復興支援

震災復興の北のベースキャンスとしての「八戸」 13:00-14:00



14:10-「八戸(の若者たち)は、東日本大震災とどう向き合ってきたか」 15:10 田中 祖氏(ハ戸大学ビジネス学部 教授) ハデ大学・ハ戸工業大学・ハ戸工業大等専門学校の学生の協議

15:15-15:30 バフォーマンス発表

15:30-17:00 東日本大震災の中での八戸の立ち位置を考える ~北部被災地の復興支援ネットワーク~

9я25ы ⊕

歌でつなごう市民の絆 出演: 柏喇小学校会場影 10:00-10:15

震災で改めて感じた絆の大切さについて考える

10:30-地域コミュニティーによるまちと人との絆 12:00

製作者、おはやし…かかわる人々の想い

11:00-「八戸三社大祭 山車ストーリー」上映 11:30 12:00-12:30、14:30-15:00 にも上級いたします。

親子の絆を育む絵本製作〜パネルディスカッション〜

13:00-「みんなで広げようコミュニケーションの輪」inはっち 14:00

ゆめみらい器 公開講座

14:00- ゆめは必ず実現する!~ゆめを叶えるために大切なこと~ 15:30 5:30 (講師) 八丸由紀子氏 (80エンタープライズ, INC 専務取締役) **この所称は、子ども中の事金 (独立行政法人知ら得少年表別協興機制) の指域会を受けて行うものです。

15:30-15:50 エンティングセレモニ 15:45-15:50 *バルー*ンリリース



両日開催イベント

地域にゆかりのある方々からの色紙による激励 がんばろう! LOVE はちのへ」 応援メッセージ展示

まちの復興 ~そして未来につなぐ~

未来に向けてのメッセージを風船に付けて、エンディングでバルーンリリーズ

市民との共同製作

環境保護のため、ご来場には公共交通機関をご利用ください。



社団法人 八戸青年会議所

〒031-0073 八戸市大字売市観音下 6 番地 http://www.hachinohe-jc.com TEL 0178-22-5501 FAX 0178-43-7364 E-mail Info@hachinohe-jc.com

まちなかキャンパス 2012

平成22年度中心市街地活性化市民ワークショブにおいて発案され2011年3月に実施された「まちなかキャンパス」を、今年度も八戸市ポータルミュージアムはっちを会場にして開催するはこびとなりました。

今回は、今年八戸工業高等専門学校を卒業する学生たちの卒業研究の報告、八戸市と縁の深い弘前大学教育学部北原教授の研究室の学生による卒業論文の報告に加えて、2年前に八戸高専を卒業し県外の大学で卒業論文をまとめあげた学生たちによる里帰り報告も発表されます。 学生たちのフレッシュな発想と研究の成果をお聞きください。

日時:2月25日(土) 17:15-19:00

会場:はっち1階

入場:無料

八戸工業高等学校建設環境工学科5年

1 猪股 希美さん 「本八戸駅通り「光のプロジェクト」の評価に関する研究」

2 川島 萌人くん 「野田村シャレットワークショップにおける課題と今後の展望」

弘前大学教育学部住居学研究室4年

はっちひろば

- 3 小山内 由希さん 「市民活動の持続可能性に関する研究」
- 4 李澤 雪江さん 「まちなかで子どもを育てる」

千葉大学工学部都市環境システム学科 4 年 (八戸高専 OB)

5 川端 康正くん

「森林材および森林空間を活用した地域活力の創出 ー千葉県山武市における里山の再活用スタディ」

> 岩手大学工学部情報システム工学科 4 年 (八戸高専 OB) 6 清水 右郷くん 「八戸検索—まちの記述と Google 検索」

主催:八戸工業高等専門学校地域文化研究センター

連絡先: 八戸工業高等専門学校総合科学科 戸田山みどり

midori-g@hachinohe-ct.ac.jp

学生まち活―八戸アートと地域活性化の研究

2012 (平成 24) 年 3 月 15 日発行

編集・発行 八戸市都市研究検討会

座長 小 林 眞(八戸市長)

委員 藤 田 成 隆 (八戸工業大学長)

中 村 覺 (八戸大学長)

岡 田 益 男 (八戸工業高等専門学校長)

学生まち活一八戸アートと地域活性化の研究プロジェクトチーム

坂 本 禎 智(八戸工業大学感性デザイン学部感性デザイン学科学部長・教授)

安 部 信 行 (八戸工業大学感性デザイン学部感性デザイン学科講師)

田 中 哲(八戸大学ビジネス学部教授)

河 村 信 治 (八戸工業高等専門学校総合科学科長・教授)

田 鎖 隆(八戸市まちづくり文化観光部まちづくり文化推進室

まちづくり支援グループ主幹)

(事務局) 大 谷 真 樹 (八戸大学・八戸短期大学総合研究所所長・教授)

晴 山 一 貫 (八戸大学・八戸短期大学総合研究所事務室長)

足 澤 和 浩 (八戸大学・八戸短期大学総合研究所事務員)